

小中学生の動機づけがコミュニケーションを図ろうとする 積極性に及ぼす影響に関する調査研究

角 田 瑞 希*・染 谷 藤 重**

(令和2年2月3日受付；令和2年4月20日受理)

要 旨

本研究の目的は、英語学習理由を規定する自己決定理論の下位理論である有機的統合理論とコミュニケーションを図ろうとする積極性の関係性について小学校と中学校でどのように違うかを比較検討することにある。参加者は、小学校5、6年生330名と中学校1、2、3年生935名の合計1265名であった。2014年12月から2015年3月に実施した。調査は、5件法による小学生31項目、中学生31項目のアンケートを用いた。アンケートの分析については、Amos22.0を用いて確認的因子分析(CFA)、共分散構造モデリング(SEM)、Wald検定を用いた。結果として、動機づけと積極性との関連では、自律性の高い動機づけだけでなく、自律性の低い外的調整も学習積極性に影響を与えていることが明らかになった。このことから、小中学校の教員は、児童生徒が分かると感じる経験を増やすことや、一般社会で使われている英語の重要性を伝えていくことが必要であると言える。英語学習の積極性を高めるためには、自律性の高い動機づけと外的調整などの動機づけの両方が影響を及ぼしているということも教員は十分に理解しておかなければならない。

KEY WORDS

Motivation：動機づけ Self-Determination Theory：自己決定理論 Elementary School Students：小学生

Psychological Needs：心理的欲求 Intrinsic Motivation：内発的動機づけ

1 はじめに

2020年度より小学校5、6年生において外国語(英語)が教科となり、年間70時間英語の授業が行われることとなった。また、3、4年生においては外国語活動が必修化となり、授業が年間35時間行われることとなった(文部科学省, 2017)。

このことから、児童が英語に触れる機会が多くなり、授業時間の増加や難易度の上昇などにより、児童の有能感や自己効力の低下が起これ、児童が動機づけ(長谷川, 2013; Sakuma, 2009; 染谷, 2019b)を低下させないような策が必要とされる。しかし、現在、小学校英語教育の研究において、どのような動機づけが、どのように他の動機づけを高めるかという議論が不十分であるように考えられる。一つの研究として、測上(2009)は、小学校6年生の段階で「英語活動が好き」と答えた生徒の小学校6年生と中学校1年生の時の技能面と情意面でどのような影響を与えるのか調査をした。小6時に「英語活動が好き」だった児童は「嫌い」だった児童に比べて、小6時に「児童英検」のスコアが高く、より授業が理解できていると感じており、小学校以外で英語に接する機会をより多く持ち、将来英語が使えるようになりたいと強く感じている傾向が確認された。さらに、小6時に「英語活動が好き」な児童は、そうでない児童に比べて、小6時で情意面・技能面で優れていたことが確認され、更に中1時までその傾向は持続していた。したがって、英語活動への好感が情意面・技能面に影響を与えていることが分かった。

この結果から分かることは、小学校から中学校にかけて、英語学習に対する動機づけを持続し、学習の到達度にも影響を与えていると言える。すなわち、小学校段階と中学校段階で動機づけを区別して考えることは危険であり、小学校と中学校で英語動機づけが持続していくことから、児童生徒の動機づけを把握することは重要であると言える。

そこで、本研究は、英語学習理由を規定する自己決定理論の下位理論である有機的統合理論とコミュニケーションを図ろうとする積極性の関係性について小学校と中学校でどのように違うかを比較検討する。

2 先行研究

2. 1 動機づけ

「動機づけ」とは、心理学の学習心理学の分野や言語習得における個人差の分野において用いられることが多い用語である。

心理学的に「動機づけ (Motivation)」とは、行動や心の活動を、開始し、方向づけ、持続し、調整する、心理的なプロセスであると言及される (上淵, 2012)。「動機 (motives)」は、動機づけのプロセスを構成する一要素にすぎないとされる (Reeve, 2018)。動機とは、動機づけのプロセスを生じさせて持続させるものの総称であり、要求、欲求、認知、情動などの変数を含むとされている。

つまり、動機には、状況変数と特性変数の両者が存在し、状況によって値が変化する変数と、特定の値を取りやすい傾向の2種類に分類される。本研究における動機とは、前者に相当し、授業という状況により値が変化する動機を扱う。

2. 2 自己決定理論

自己決定理論とは、成長と統合へと向かう自己の傾向性及び、より統合された自己の感覚を発達させていく傾向性を生得的に備えているという生命体論の視座に立った動機づけの考え方である (Ryan & Deci, 2000a, 2000b)。

Ryan and Deci (2017) によれば、自己決定理論は、6つの下位理論 (認知的評価理論、有機的統合理論、因果志向性理論、基本的心理欲求理論、目標内容理論、及び関係性動機づけ理論) に分かれており、その理論が各々関連性を持っているとされている。本研究では、英語学習理由を規定する自己決定理論の下位理論である有機的統合理論を中心に扱う。

2. 3 有機的統合理論 (Organismic Integration Theory: OIT)

有機的統合理論とは、Ryan & Deci (2000b) によれば、外発的動機づけには自律化の程度に応じて5つの段階があるとされる。自律化とは、価値や調整を自分の内に取り込んでいく「内面化」と、当人が自らの行動を調整する主体として位置づけられて自己の感覚を起源として行為が生じるような「統合」が生じるプロセスである。英語教育の分野でもこの考えは、応用できるとして、廣森 (2010) は、「行動の内在化や自己決定性の程度によって外発的動機を細分化し、動機づけの各タイプを、連続体を成すもの」と述べている (p.52)。また、近年、Reeve (2018), Oga-Baldwin and Nakata (2017) によれば、英語学習理由としての、外的調整と取り入れの調整を合わせて、他律的動機づけ (controlled motivation)、同一視的調整、統合的調整、及び内的調整を合わせて、自律的動機づけ (autonomous motivation) と呼ぶとしている (図1参照)。

無動機 Amotivation	外発的動機づけ Extrinsic Motivation				内発的動機づけ Intrinsic Motivation
無調整 Non Regulation	統制(他律)的動機づけ Controlled Motiovation		自律的動機づけ Autonomous Motivation		
動機づけの欠如 Lack of Motivation	外的調整 External Regulation	取り入れ的調整 Introjected Regulation	同一視的調整 Identified Regulation	統合的調整 Integrated Regulation	内発的調整 Intrinsic Regulation
	低い←		自己決定度		→高い

図1 連続体としての動機の各タイプと自己決定性 (染谷, 2018, p.260より引用)

Ryan & Deci (2017) の指摘する自己決定性の違いによる動機づけのタイプの詳細を下記に示す。

「外的調整 (External Regulation)」とは、最も他律的な外発的動機づけである。これは外的な欲求を満たすため、あるいは報酬随伴性に応じるために行為するような場合を示す。条件に対して受動的に従うような心理状態を指す。「取り入れ的調整 (Introjected Regulation)」とは、外的な調整を自己の内部に取り込んではいないのだが、それが自分のものとして十分に受け入れられていない段階である。罪の意識や不安を避けるために行為する場合、あるいは誇らしさのような自尊心 (self-esteem) を高めるために行為する場合を指す。この二つが総じて他律的動機づけである。また、「同一視的調整 (Identified Regulation)」とは、行為の目標やコントロールを意識的に価値づけ、その行

為自体が自己の内部に受容され、個人的に重要なものとして認識されているような心理状態を指す。「統合的調整 (Integrated Regulation)」¹⁾とは、それを行うことが自己像の重要な部分となっている。自分の価値観、必要性、アイデンティティなどと調和のとれた選択的行動をとる心理状態を指す。最後に、「内的調整 (Internal Regulation)」とは、行為に従事することそれ自体が目的となっている。活動の目的に意義や価値が見出されている心理状態を指す。最も自律的な外発的動機づけで、この調整が、最も内発的動機づけに近いものであるとされている。この3(2)つが総じて自律的動機づけである。

3 本研究の目的

本研究の目的は、英語学習理由を規定する自己決定理論の下位理論である有機的統合理論とコミュニケーションを図ろうとする積極性の関係性を小学校と中学校でどのように違うかを比較検討することである。

4 研究の方法

4. 1 研究参加者

本研究の参加者は、小学校では、「I県K市立T小学校5年生67名、6年生75名」「N県I市立I小学校5年生23名、6年生30名」「N県I市立O小学校5年生23名、6年生22名」「N県I市立T小学校5年生46名、6年生44名」の330名であった。

中学校においては、「N県I市立N中学校1年生74名、2年生67名、3年生69名」「N県J市立J中学校1年生154名、2年生180名、3年生153名」「N県J市立N中学校1年生14名、2年生22名、3年生18名」「N県N市立K中学校1年生52名、2年生75名、3年生57名」の935名であった、合計1265名の児童生徒が参加者となった。

4. 2 実施時期

2014年12月から2015年3月に実施した。調査の際は調査校へ出向き、各クラスで約20分の回答時間を設け、児童生徒自身に回答させた。ただし、I県K市立T小学校のみ、輸送式でアンケートを行った。

4. 3 調査方法

調査は、5件法による小学生31項目、中学生31項目のアンケートを用いた。質問項目は、廣森(2006)を参考に作成した動機づけに関する25項目と、自主製作した英語の学習活動に対する積極性を問う5項目であった。

4. 4 分析方法

アンケートの分析については、Amos22.0を用いて確認的因子分析(CFA)、共分散構造モデリング(SEM)、Wald検定を用いた。

5 結果と考察

5. 1 確認的因子分析(CFA)の結果

モデル適合度指標は、 $\chi^2=1133.337$, $p<.01$, CFI=.916, RMSEA=.068, AIC=1265.337であった。記述統計量を付録1に示す。

したがって、この確認的因子分析のモデルとデータの適合は良いことが分かる。すなわち、このモデルはデータを適切に説明していることが確認された。全体として、それぞれの因子間相関が高いことが分かる。

因子間相関について、Ryan and Connell (1989)では、動機づけの各タイプ間にシンプレックス構造を想定している。これは、図2における隣接する概念間(例えば、内的調整と同一視的調整)では強い正の相関が見られ、連続体の対極に位置する概念間(例えば、内的調整と外的調整)では、強い負の相関、あるいは無相関を示すという仮定であるが、今回の分析では、対極に位置する概念間でも正の相関が見られた。しかしながら、内的調整から外的調整に移るにつれて、相関は低くなっているため、自己決定の程度に基づいて、内的調整、同一視的調整、取り入れ的調整、外的調整という順に連続体を形成していると考えられるであろう。そして、このことは、次のように解釈できる。英語の学習を楽しみと感じたり、興味があったりする児童生徒は、英語の必要性を感じている。また、周囲や社会からの強制的な英語学習を強いられていると感じている児童生徒は(外的調整が高い)、将来に対する不安や周りからの評価を気にして英語学習に臨んでいる(取り入れ的調整が高い)。一方で、自分のために英語を身に付けたいという動機づけの学習者(同一視的調整)と、将来に対する不安や周りからの評価を気にして英語学習を行う動機づけの学習者(取り入れ的調整)の相関が強いことから、これらの4つの要因は密接に関連し合いながら、児童生

徒の英語学習に関する動機づけを規定している可能性があることが分かる。

したがって、このアンケートの因子は、小学校高学年、中学生に適合していると言える。

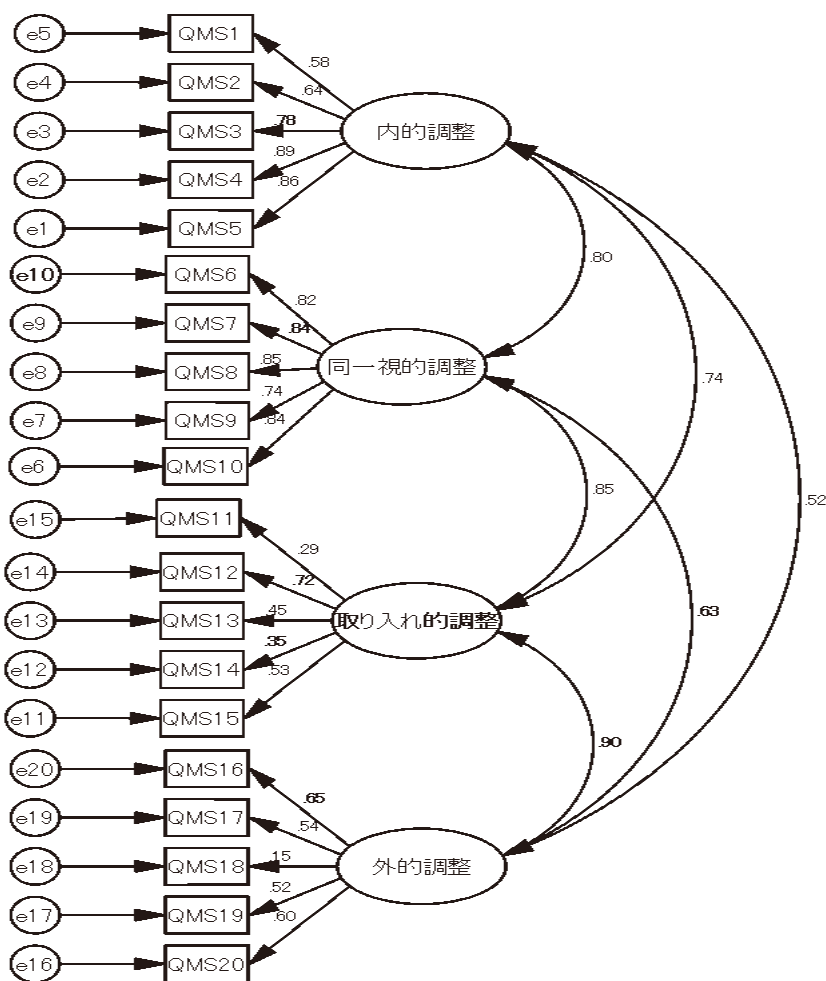


図2 確認的因子分析の結果

5. 2 小学生と中学生における動機づけと英語学習(授業)の積極性

5. 2. 1 小学生における動機づけと英語学習(授業)の積極性のパス解析の結果と考察

実施したアンケート項目の中で、英語学習(授業)に関する質問も行った(表1)。そこで、外国語活動として年間35時間学習している小学生と、英語の授業として年間140時間学習している中学生で分けて、関係性を検証するためパス解析を行った。結果は、以下の通りである。

表1 積極性に関するアンケート

番号	項目内容	回答欄
1	積極的に英語学習(授業)に参加している。	(1・2・3・4・5)
2	積極的に英語を聞こうとしている。	(1・2・3・4・5)
3	積極的に英語を話そうとしている。	(1・2・3・4・5)
4	積極的に英語を読もうとしている。	(1・2・3・4・5)
5	積極的に英語を書こうとしている。	(1・2・3・4・5)

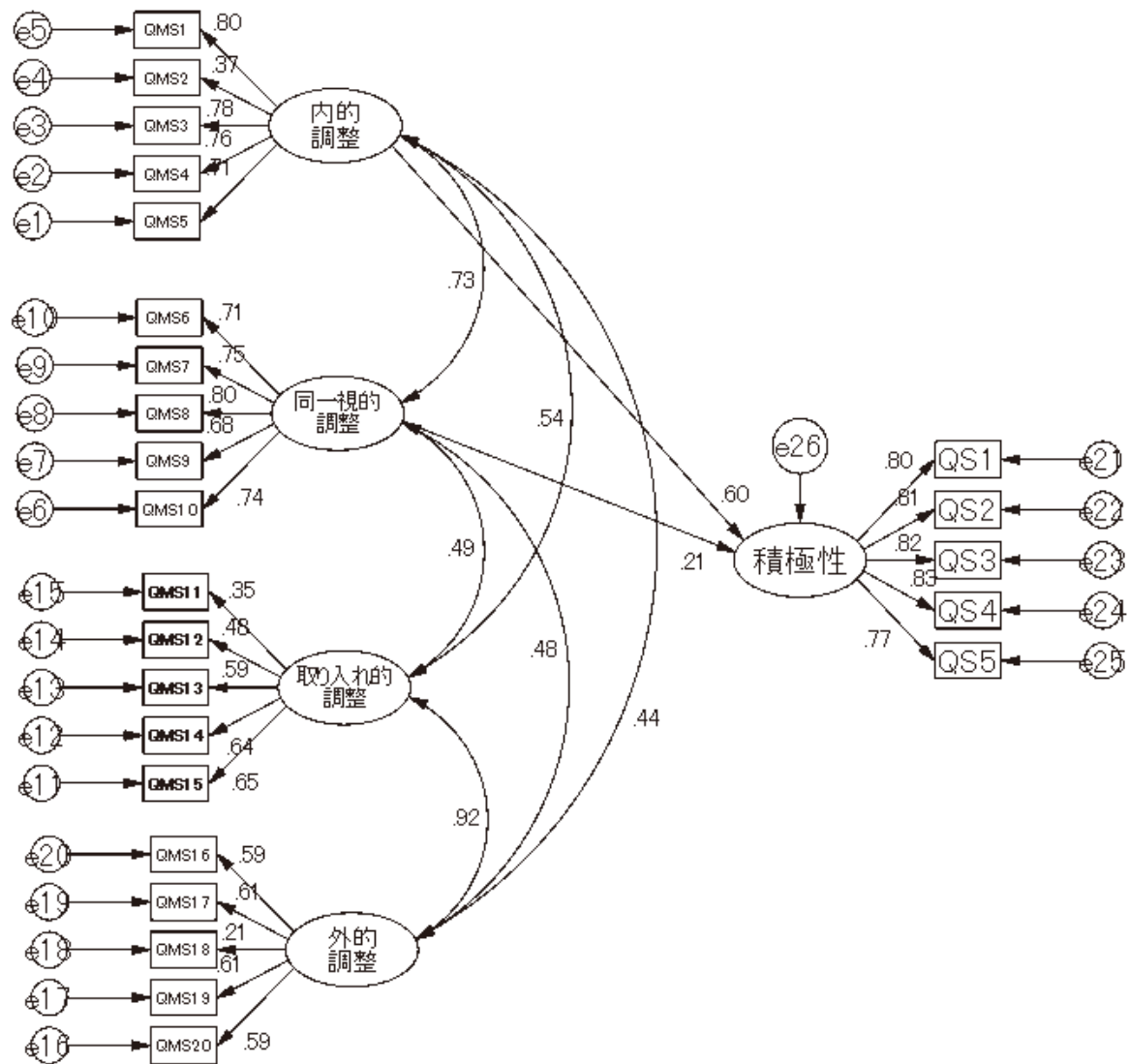


図3 小学生の英語学習(授業)と動機づけのパス解析の結果

第一は、小学生における英語学習(授業)と動機づけのSEMの結果である。最初に、Amos22.0を用いてSEMを行った。モデル適合度指標は、 $\chi^2=713.644$, $df=265$, CFI=.878, RMSEA=.072, AIC=883.644であった。そこで、有意ではないパスを削除して(Wald検定)、再度検証を行った。その結果、モデル適合度指標は、 $\chi^2=714.207$, $df=267$, $p<.01$, CFI=.878, RMSEA=.071, AIC=880.207であった。CFIは、0.9にはとどいていないが人数を増やせば適合度は高くなると考えられる。同様に、RMSEAにおいて、値が.072から.071に下がった。また、AICにおいても、値が883.644から880.207に下がったので、こちらのモデルを採用することにした。

この結果から、小学生における英語学習(授業)と動機づけでは、内的調整及び同一視的調整が積極性に対して有意差があることが明らかになった。林原(2013)において、「日本の高学年児童の英語学習動機の因子構造は「有用性」、「内発的」、「交流欲求」、「不安回避」の4因子構造であった。」(p.124)と述べており、今回の結果が妥当であると言える。よって小学生段階では、英語を楽しいと感じさせたり必要性を感じさせたりするような工夫が必要であると言えるだろう。教師は児童に英語に対して興味・関心を抱かせるために、子どもの実態に沿ったものを活動に取り込み、活動を構成していくことが重要であると言える。

5. 2. 2 中学生における動機づけと英語学習(授業)の積極性のパス解析の結果

第二に、中学生における英語学習(授業)と動機づけのSEMの結果を示す。

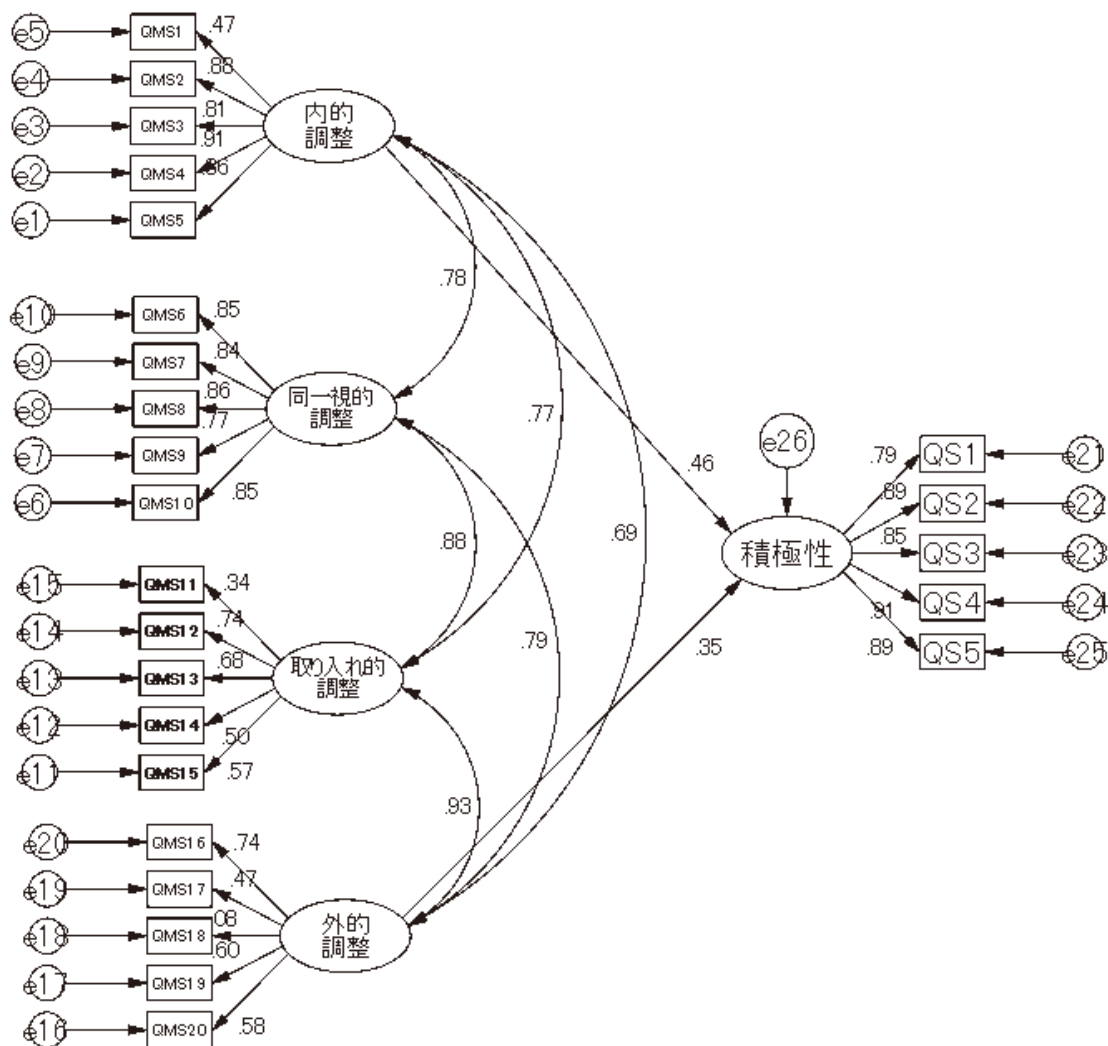


図4 中学生の英語学習(授業)と動機づけのパス解析の結果

最初に、Amos22.0を用いたSEMを行った。モデル適合度指標は、 $\chi^2=962.321$, $df=265$, $p<.01$, CFI=.914, RMSEA=.074, AIC=1132.321であった。そこで、有意ではないパスを削除して(Wald検定)、再度検証を行った。その結果、モデル適合度指標は、 $\chi^2=827.787$, $df=244$, $p<.01$, CFI=.927, RMSEA=.070, AIC=987.787であった。CFIにおいて値は.914から.927に上昇し、RMSEAにおいても値が.074から.070に減少した。AICにおいて値は1132.321から987.787に減少したので、このモデルを採用することにした。

この結果から、中学生における英語学習(授業)と動機づけでは、内的調整と外的調整が積極性に対して有意であることが明らかになった。

小学生では、自律性の高い動機づけが英語学習に対して有意であることから、中学生段階では、最も自律性の高い内的調整と最も低い外的調整が英語学習(授業)に対して有意に差があることが明らかになった。このことから、英語の勉強に興味を持って楽しいと感じるだけでなく、社会の中での英語の必要性や周りの大人からの影響も大きく、それが英語学習の積極性にも関係しているので、教師や大人からの働きかけも適度に必要であると言えるであろう。しかし、学習を強要するような関わり方は、英語好感を低下させるので、十分に配慮していかなければならない。

6 まとめと今後の課題

本研究では、英語学習理由を規定する自己決定理論の下位理論である有機的統合理論とコミュニケーションを図ろうとする積極性の関係性を小学校と中学校でどのように違うかを比較検討した。

まとめとして、積極性との関連では、自律性の高い動機づけだけでなく、自律性の低い外的調整も学習積極性に影響を与えていることが明らかになった。このことから、小中学校の教員は、児童生徒が分かれると感じる経験を増やすことや、一般社会で使われている英語の重要性を伝えていくことが必要であると言える。中学生の学習の積極性を高めるためには、自律性の高い動機づけと外的調整などの動機づけの両方が影響を及ぼしているということも十分に理解しておかなければならない。

今後、2020年度から英語が小学校で教科化される影響で、上記の結果が変化する可能性は十分にある。従って、適切な方法で、再調査・検討を行うことが必要とされるだろう。

付記

本稿は、2016年8月20日・21日に獨協大学で行われた「全国英語教育学会第42回埼玉研究大会」での発表「小中連携を目指した小学生と中学生における英語学習動機づけの構造的変化－有機的統合理論を用いた横断的研究－」に加筆修正を加えたものである。

引用文献

- 内山寿彦・染谷藤重 (2020). 「小学生における動機づけの変化に関する予備調査－自己決定理論に着目して－」『上越教育大学研究紀要』39(2), 477-485.
- 上淵寿 (編著) (2012). 『キーワード動機づけ心理学』東京：金子書房.
- 染谷藤重 (2018). 「小学校高学年と中学生の動機づけの差異に関する調査研究－有機的統合理論に着目して－」『駒沢女子大学研究紀要』第25巻, 259-271.
- 染谷藤重 (2019). 「小学校英語授業における心理的欲求充足が聴解力に及ぼす影響に関する調査報告」『JACET中部支部紀要』第17号, 45-54.
- 長谷川修治 (2013). 「小学校英語の開始学年と指導形態の及ぼす効果－習熟度テストと意識調査による比較検討－」『JES Journal』13, 163-178.
- 林原慎 (2013). 「日本の高学年児童における英語学習動機に影響を及ぼす要因」. 『日本教育工学会論文誌』, 37(2), 117-127.
- 廣森友人 (2006). 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版：東京.
- 廣森友人 (2010). 「第3章 動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編) 『成長する英語学習者 学習者要因と自律学習 (pp.47-74)』東京：大修館書店.
- 舘上啓子 (2009). 「小学6年時の「英語活動が好き」は、中学1年時の英語好感、英語力、自己評価、将来への意欲に影響があるか。－一公立小学校の卒業生のデータから－」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 研究紀要』第28号, 163-178.
- 鹿毛雅治 (2013). 『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』東京：金子書房.
- 文部科学省 (2018). 「高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073_09_1_1.pdf
- Cheon, S. H., Reeve, J., & Song, Y. G. (2016). A teacher-focused intervention to decrease PE students' amotivation by increasing need satisfaction and decreasing need frustration. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 38, 217-235.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination theory*. New York, NY: Plenum Press.
- Jang, H., Kim, E.-J., & Reeve, J. (2016). Why students become more engaged or more disengaged during the semester: A self-determination theory dual-process model. *Learning and Instruction*, 43, 27-38.
- Noels, K. A., Pelletier, L. G., Clement, R. & Vallerand, R. J. (2000). Why are you learning a second language? Motivational orientations and Self-determination theory, *Language Learning*, 50(1), 57-85.
- Oga-Baldwin, W. L. Q., & Nakata, Y. (2017). Engagement, gender, and motivation: A predictive model for Japanese young language learners. *System*, 65, 151-163.
- Reeve, J. (2018). *Understanding motivation and emotion* (7th edition). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- Ryan, R. M., & Connell, J. P. (1989). Perceived locus of causality and internalization: Examining reasons for acting in two domains. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 749-761.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000a). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25, 54-67.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000b). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 749-761.

- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*: Guilford Press.
- Sakuma, Y. (2009). Changes in listening ability and psychological factors influenced by elementary school English activities. *ARELE*, 20, 221-230.
- Vallerand, R. J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 29, 271-360. San Diego, CA: Academic Press.

付録1 学年ごとの動機づけの記述統計量

学年 動機づけタイプ	小 5 (N=156)		小 6 (N=169)	
	M	SD	M	SD
内定調整	4.07	1.07	3.60	.79
同一視的調整	4.32	.73	4.08	.79
取り入れ的調整	3.14	1.23	2.87	.70
外的調整	2.82	.88	2.76	.67

学年 動機づけタイプ	中 1 (N=293)		中 2 (N=342)		中 3 (N=295)	
	M	SD	M	SD	M	SD
内的調整	3.28	1.24	2.90	1.10	3.15	1.13
同一視的調整	3.74	.98	3.55	1.07	3.71	1.06
取り入れ的調整	2.85	.82	2.65	.84	2.74	1.05
外的調整	3.00	.75	3.02	.83	2.84	.81

付録2 アンケート項目

1	2	3	4	5
全く思わない	思わない	どちらでもない	思う	とても思う

【質問】「英語の勉強をする理由」について、自分の考えに最も当てはまる数字に○をつけてください。質問は20項目あります。すべてに回答してください。

番号	質問項目	回答欄
1	英語を勉強するのは楽しいから。	(1・2・3・4・5)
2	英語の勉強に興味があるから。	(1・2・3・4・5)
3	英語の授業が楽しいから。	(1・2・3・4・5)
4	英語の知識が増えることは楽しいから。	(1・2・3・4・5)
5	英語を勉強して新しい発見があると嬉しいから。	(1・2・3・4・5)
6	将来使えるような英語の技能を身につけたいから。	(1・2・3・4・5)
7	自分にとって必要なことだから。	(1・2・3・4・5)
8	英語を身につけることは重要だと思うから。	(1・2・3・4・5)
9	外国語を少なくとも一つは話せるようになりたいから。	(1・2・3・4・5)
10	自分の成長にとって役立つと思うから。	(1・2・3・4・5)
11	教師に自分は良い生徒だと思われたいから。	(1・2・3・4・5)
12	英語を勉強しておかないと、後で後悔 ^{こうかい} すると思うから。	(1・2・3・4・5)
13	英語で会話ができると何となく格好 ^{かつこう} がよいから。	(1・2・3・4・5)
14	英語を勉強しなければ、気まずいと思うから。	(1・2・3・4・5)
15	英語くらいできるのは、普通だと思うから。	(1・2・3・4・5)
16	よい成績を取りたいと思うから。	(1・2・3・4・5)
17	英語を勉強するのは、決まりのようなものだから。	(1・2・3・4・5)
18	周りの大人にうるさく言われるから。	(1・2・3・4・5)
19	英検などの資格を取りたいから。	(1・2・3・4・5)
20	英語を勉強しなければならない社会だから。	(1・2・3・4・5)

A Survey on the Influence of Motivation of Elementary and Junior High School Students on their Positive Willingness to Communicate

Mizuki KAKUTA* · Fujishige SOMEYA**

ABSTRACT

The purpose of this study was to compare the relationship between the elementary school and junior high school in terms of the relationship between organic integration theory, which is a mini theory of self-determination theory that governs the reasons for learning English, and the positive willingness to communicate. Participants were 330 in 5th and 6th grades and 935 in junior high, 1st, 2nd and 3rd grades, for a total of 1265 participants. It was implemented from December 2014 to March 2015. The survey was conducted using a questionnaire of 31 items for elementary school students and 31 items for junior high school students based on the five-point linker method. For the analysis of the questionnaires, Amos22.0 was used for confirmatory factor analysis (CFA), structure equivalent modeling (SEM), and Wald test. As a result, concerning motivation and positiveness, it became clear that not only motivation with high autonomy but also external regulation with low autonomy affected learning positiveness. It can be indicated that elementary and junior high school teachers need to increase the experience that students feel and understand the importance of English used in the general public. To increase the positiveness of English learning, teachers must fully understand that both motivations such as autonomy and external coordination, affect.

* Tochio Minami Elementary School in Nagaoka ** Humanities and Social Studies Education